

企画案内

問題提起のために

——祝えてしまう幕切れを、だから演出してやったろう、なんてことを思いつくのは、きつとヒポクリートかそうでなければヒポコンデルにちがいない。

1970ねん だという どうかで聞いたことがあるよな気がするナナジュエーン——

たしかに <わたし>は <わたし>であって <あなた>ではないが、 <わたし>は <あなた>で <あなた>は <わたし>かもしれないじゃないか、と行かした誰かがいました。けれどもやっぱり <私>は <わたし>でないけれど <わたし>は <私>でできりえないのだ。

むかし、男で街へ飛び出した <わたし>はここで <わたしたち>に解近しました。ただ帰って来てみたら、 <わたし>は何処かへいなくなっちゃったのです。それで私は <わたし>を訪ねて当てのない流浪の旅へと旅立ちをしたのです。白茶けた建築のたち並ぶマロニエの舗道も、歩いてみたし、人知れぬ谷間にひっそりと口を開ける洞穴に入り浸りしてでもみたし、北風の吹く朝田舎の町にも降り立ってみました。ひょおと頭が鳴らす雄松の枝の陰を覗いてもみたし、はまなすの咲く頃地の果ての碑に佇んでもみました。勿論カーテンも閉めきった4畳半にも閉じ込めたし、雨のしほ降るネオンの街を彷徨ってでもみたのです。果てにはとうとうやわらかな雲にまで乗ってでもみたのです……でも <わたし>は何処にも見つかりません。肌寒い夜更け私は悲歌にくれて泣き寝入ってしまった。するとどうでしょう、 <ゆめ>の中にあんなに探したく <わたし>がいるではありませんか。ああやっとなんかこれだけで帰ることができると私は嬉しくなって飛び起きました。すると途端に <ゆめ>は覚めて <わたし>は掻き消えてしまったのです。なんということだ ネエあなた 私は思案に暮れました、……10ねん……15ねん……私と <わたし>の波がなくて、私が <わたし>になれないなんて、嗚呼、コレハナントイウ悲劇デセウ……25年……ついに結論ができました、眠って <ゆめ>をみるから覚めてしまうので、目醒めて <ゆめ>をみれば決して覚めることはないではないか、という古今東西永遠の真理を私は発見したのです。

でも、それからの私がシワセな人生を送ったか、ということは誰もしりません。

自らの認識に基づく行為がその意図と遠く隔った結果を生む時、私は悲歌にくれ落らうとする、しかし、私には帰るべきムラがあるだろうか？ 私には帰すべき原点はどこにもない。故郷は既に時代の漂流物として空に霧散した。帰すべき最後の拠点ふるさとも失われた以上、私の安寧を得ることができるのは最早、観念幻想の世界だけとなった。私は手早くしかも多大の快楽を手に入れることができるという女へと駆る……マキから圭子へ、圭子から真理へ……と、しかし私はここで <わたし>を見出すことはできなかった。そうした私は自らの幻想空間の拡大を図ろうとやたらと言葉を覚え込み、更に空間的拡大をも図ろうとして、生活→建築物→地域→都市→社会というチェーンを勝手に描いて行為する、他人と話し、時にはバリエードを作ったりしながら文章を書き芝居を

やり建築の設計すらもやり、時には空間を勝手に解釈し時間を消滅させるつもりで意図的に お祭り とやらをやってみたりもする。しかし後に残るのはいつも、言葉の群とコンクリートの遮蔽物でありそしてやっぱり不断に在り続ける共同性とかいうみんな破壊衝動をかられる良しいものだけである。私が他の私という実存と有機的連関性の内に <わたしたち> を形成することはやっぱりできないのか？ 誰さんは私ではないし圭子の夢は開いてもそれは圭子のだ、愛したらキズがつくのは当たり前であつても甦ることはありはしない。甦るのは日々を思い出にしたいという心情だけだ。他の個の実存に対する想い入れすらもベダンチックにできなくなった オナベツ不在の私は密室に於ける 孤独な祝祭にすらも帰帰しえなくなった。私には帰すべき何物も残されていない、従って私は、帰帰の思考を断ち切らねばならない。

世界諒解を自他もしくは主客関係を基軸にするのはすぐれて近代的世界諒解の地平であり、同様にまた本質と現象を対置する思考、更に、理性に対する感性をもってするのきわめて近代主義的であるといわねばならない。帰帰の思考に於れた私は primitive に存在に対して思考の再構築を迫られている。しかも日本語なる言語を話すことを強いられた私は、因われの位相に着地させられようともそれが幻想主体を形成する weight の故に言語に固執しつつアンビヴァレンツな感性理性を持つ自らの行為、その位相と structure を存在証明としてではなく、知りたいと思ふ、そしてそういう私という個が他の私という個と協業したりしなかったりしながら共同主観を形成している。その意味で社会は多層共同体社会であり、ブルジョアはその全てを支配下におこうとする。それはつまり、ベクトルは一つではないということであり、互に打ち消しあい、または相乗して作用しあっている。打ち消し合う時互にその個的存在まで抹殺せんとするのは当然のことであり、相乗する時には恐しくエネルギーになる。それは、それこそ時間も空間も関係なくつねに起されている、私はいまその structure を知りたいのだ。

いま、時間と空間を算奪されつつ私の思考さえも不時着されんとし、ブルースをウタウことすら引摺われんとしている時、たとえそれが数の旋回飛行であるとしても飛び続けなければならない。真実では底なし井戸の底に横たわっているのじゃなくてそこら辺にごろごろ転がっているものことだし、輝ける日々到来などというのは血迷い言だよ。時間と空間の占有の王国は彼方にもどっこにもありはしない八千年王国なのである。無限の可能性を秘めた空間 space ∞ の創出などと云うことは、拙造すらもできないのだから止した方がいい。ほんとのことは黙ってる方がいい。強われないですむからです。なんせ、マニエリスムの時代というじゃありませんか、我々にできることはせいぜい、おらもうヤケツパチだなどとわめて space ∞ をつくることぐらいた。かくて私はなおアジテーションをし続ける。アンビヴァレンツを宿命として擔おうとする闘士たちよ。

暗黒の時代から灌漑が君たちに祝福を送るだろう。

この見事に穀をなしたに正気のサマを見たまえ。何よりもそこに希望が輝いているではないか。マニエリスムの時代に訣別を告げよ！ global な変革の時代の予兆を感ぜよ！ 暗黒の時代に招待状をウナ電で！